

大平正芳記念財団レポート

第35回「大平正芳記念賞」・第33回「学術研究助成費」 贈呈式

令和元年6月12日(水)、財団合同役員会のあと正午から、300名の参会者のなか「第35回大平正芳記念賞」「第33回環太平洋学術研究助成費」の贈呈式が東京・ホテル・グランドヒル市ケ谷で行われました。



受賞者の皆さんと大平知範理事長（前列中央）

贈呈式ははじめに、大平知範理事長より財団の活動と令和元年度の各受賞者の紹介がありました。次に末廣昭・運営選定委員長より選考の過程の説明と選評があり、「大平正芳記念賞」を梅川葉菜氏（駒澤大学法学部政治学科専任講師）ほか5名の方に贈りました。続いて受賞者を代表して上英明氏（神奈川大学外国語学部准教授）が謝辞を述べられました。その後、日本トップリーグ連携機構会長の川渕三郎氏の挨拶と乾杯のあとパーティに移り、各受賞者を交えて歓談に入り、盛況裡に午後2時過ぎお開きとなりました。

2019（令和元）年 9月発行



大平知範理事長の挨拶

本日は、皆様には大変お忙しいところ、また蒸し暑い中、ホテル・グランドヒル市ヶ谷にお越しいただき有難うございました。厚く御礼申し上げます。

小さい財団ながら皆々様にご支援を賜り40年近く事業を続けさせていただいており、日頃の皆様のご支援に厚く感謝申し上げます。

本年12月は大平正芳訪中40周年、また、来年9月は「大平学

2019年6月12日に行われた贈呈式でのスピーチ
及び各受賞者から寄せられた謝辞を掲載します

校」設立40周年、「北京日本学研究センター」が設立35周年と三つの節目の年が重なっており、それにあたり1年半の準備をし、来年9月に北京にて展示、シンポジウムのイベント開催を考えており、清華大学、北京大学、北京外国語大学と検討を進めております。

本日のゲストスピーカーとしては日本トップリーグ連携機構会長であられる川渕三郎様にお願いしております。

ご紹介するまでもありませんが、川渕三郎様は初代Jリーグチェアマン、日本サッカー協会会長、日本バスケット協会会長など歴任され、現在でもなおスポーツ界を牽引されておられます。

本日は、グローバルな見地から世界のスポーツ界の現状と未来をお話しいただきたく思っております。

個人的な思い出として私がまだ20代のころ、ゴルフで一緒にさせていただいたのですが、昼食の時、ふと川渕様の横顔を見ると、実に祖父とよく似ているなあ、と思ったことがあります。ご本人には不本意かもしれませんが・・・（良い思い出となっております）。

本年度は、6名の先生方が、第35回大平正芳記念賞を受賞されます。先生方のこれまでの長年にわたる研鑽に対し、心より敬意を表させていただきますと共に喜び申し上げます。

本日は、粗酒・粗こう、万事行き届きませんが、お時間の許す限り、お食事・ご歓談をいただきますようお願いいたします。なお、昨年新企画として発行し大好評をいただいております『硯^{けんてきこう}滴考』は本日第4号ができあがりました。お帰りの際お持ち帰りいただく予定であります。

有難うございました。



末廣昭運営・選定委員長の選評

まず、受賞者の6名のみなさん、このたびの受賞おめでとうございます。

2018年度は全部で34冊の本が、他薦、自薦により事務局に寄せられました。昨年10月から今年の1月まで計4回の運営・選定委員会での議論の結果、お手もとの『令和元年度大平正芳記念財団の事業』に示しましたとおり、計6名のかたの授賞を決定しました。受賞者の数は、昨年同様に6名のかたを選んでいます。なお、今年度は4名の記念賞とは別に、「特別賞」として2名のかたを選んでいます。その点につきましては、あとで説明をさせていただきます。

以下、6名の方の授賞理由を紹介させていただきます。

1番目は、梅川葉菜氏の『アメリカ大統領と政策革新—連邦制と三権分立制の間で』です。

従来、アメリカ政治につきましては、厳格な三権分立のもとで大統領の権限が限定されているという理解と、連邦制のもとでは州政府の役割が乏しいという理解が一般的でした。

ところが、近年では議会を介さずに政策を変更する大統領が登場し、それに協力することで重要な役割を果たす州政府が登場するようになりました。この傾向は、じつはトランプ大統領の登場以前から始まっています。

本書の最大の意義は、三権分立制と連邦制を、相互に独立したものとして扱ってきた従来の研究を刷新して、両者を統合的に捉え、大統領が活用できる新しい政治手法と捉え直した点にあります。その際、梅川氏が着目したのは、特区認可権 (waiver authority) と呼ばれる制度でした。つまり、特定の地域とある期間内に限って、特定目的の事業の実施を連邦政府が州政府に認める制度です。アメリカではレーガン政権以降、歴代の大統領がこの特区認可権の制度を利用して、大統領が議会を介さずに福祉、医療保険、教育の分野で政策を実施するという新しい動きがあり、本書はこの点を詳細に明らかにしました。

この特区認可権の運用と三権分立制・連邦制の変容は、現在のトランプ政権を理解するうえでも不可欠の論点です。本書はアメリカ政治の研究に新たな視座をもたらし、その独創性と高い洞察力は、まさしく「大平正芳記念賞」にふさわしいと判断しました。

2番目は、カミ・ヒデアキ氏の『Diplomacy Meets Migration: US Relations with Cuba during the Cold War』と題する本です。

この本は、冷戦期の米国とキューバの関係史について、「キューバ政府」「米国政府」「キューバ系米国人」の3者に焦点をあてて描いた作品です。1962年のキューバ危機、すなわち、キューバで核ミサイル基地の建設が発覚した事件は、米ソの世界戦争に発展しかねない危機であり、記憶にある方も多いかと思います。しかし、カミ氏は、それとは別の「移民とその家族による、もうひとつの、忘れてはならないキューバをめぐる物語」があったことを指摘し、その過程を克明に描きだします。評者の青山氏は、「キューバからの移民とその

家族の存在を深く胸に刻むこととなった」と、読後の感動を選評に書いておられます。

本書は学術書でありながら、一気に読ませる魅力に満ちています。第一に、ワシントン対ハバナという従来为国家間の関係に加えて、キューバ系米国人が多数居住する「マイアミ」を分析に加えたことで、対象が広がりました。第二に、本書の構成のすばらしさも魅力のひとつです。わずか半年の間に12万5000人のキューバ人がマイアミになだれこんだ1980年のマリエル危機を真ん中にすえて、キューバと米国の間の国と人の関係を、いままで入手不可能だった史料の利用も含めて描き出した点が、選考委員から高い評価を受けました。トランプ政権のもとで、移民・難民問題が喫緊の課題となっている現在、本書は「大平正芳記念賞」にふさわしい本と判断しました。

3番目は、Richard W. Carney氏の『Authoritarian Capitalism Sovereign Wealth Funds and State-Owned Enterprises in East Asia and Beyond』と題する本です。

東アジアの経済を見ていくうえで、政府系企業の存在は決して無視することができません。とくに最近では、国家が直接経営する国営企業ではなく、政府が出資し証券市場に上場している政府関連企業、いわゆるGLCの存在が重要です。そして、これらのGLCに出資しているのが、政府投資ファンド、Sovereign Wealth Fund (SWF)です。東南アジア最大の医療サービス企業集団であるマレーシアのIHHヘルスケア社を所有するカザナ・ナショナル社や、シンガポール・テレコム社を所有支配するテマセク・ホールディング社などが、このSWFの典型です。

SWFは東アジア全域で確認できますが、カーネイ氏は、各国政府の企業に対する規制、つまり、企業がバナンスの強化、情報開示の促進などと、当該国のSWFの投資活動の活発さ、そして当該国の政治形態の違いの3つの相互関係を分析しました。その中でも、とくに注目したのは、複数政党が存在し

与党が強い権威主義体制のシンガポールと、与党が弱い権威主義体制のマレーシアの2国です。そして、選挙において政府与党の得票率が下がると、傘下にある SWF の活動を抑制し、民間企業の活動を支援し、逆に得票率が上がると SWF の透明性を曖昧にして、その投資活動を活発化させる傾向を明らかにしました。

経済の証券化が進む東アジアにおいて、ますます重要な位置を占めつつある SWF について、初めて本格的な比較研究を行った本書は、東アジア経済論に新しい視点を持ち込んだ研究として、「大平正芳記念賞」にふさわしいと判断しました。

4番目は、森万佑子氏の『朝鮮外交の近代—宗属関係から大韓帝国へ』と題する本です。

近年、東アジアにおける国際関係史や外交史の分野では、優れた研究成果が次々と生まれています。森氏の作品もそのひとつですが、本書の重要な貢献は、彼女の研究が19世紀後半、とくに1882年から1897年にかけての朝鮮の外交について、韓国・朝鮮側の研究成果をふんだんに使って、「受身」ではなく「主体」としての朝鮮に焦点をあてた点にあります。森氏がソウル大学博士課程に留学したがゆえに、なしえた成果だと思います。

19世紀の後半の朝鮮の外交については、従来は、中国に対する「宗属的外交関係」から、西欧が採用する国際基準に合わせた「近代的外交関係」への移行過程と捉える研究が主流でありました。これに対して、森氏は「二つの中華」という独自の観点を導入して、この時期の朝鮮の外交政策を分析します。つまり、清という現実的な意味での中華の存在と、朝鮮自らが墮落した清に代わって正当な中華の継承者であるべきだという認識の共存がそれです。その結果、朝鮮は欧米諸国との関係では条約規定にもとづいて「保護」を求めつつ、他方では、自らを中華とする思想において日本には保護を求めなかった状況が、論理的に明らかにされました。

これまで、日本、イギリス、米国、中国の史料にもとづいて議論されてきた朝鮮の外交史を、朝鮮の史料と朝鮮・韓国の研究者の議論を踏まえて本格的に論じたという功績で、「大平正芳記念賞」にふさわしい研究と判断しました。

これから先の2冊は「特別賞」です。特別賞というのは、候補作が厳密な意味では学術書ではないが、「大平正芳記念賞」が目指しているアジア太平洋の政治経済への理解を深めるという点では、特別の貢献を行っているとは判断した場合に授与してきました。最近では、2015年度の高橋徹さんの『タイ混迷からの脱出』、2016年度の沈志華さんの『最後の「天朝」—毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮』が特別賞を受賞しています。この2冊は優れたルポルタージュという性格が強かったといえます。

一方、今回特別賞に取り上げたのは、いずれも研究者の著作ですが、それぞれ「新書」という形式で示しながら、研究成果を分かりやすく魅力的に発信した本です。学術研究賞の選考対象にはなかなかならない新書も、「大平正芳記念賞」の重要な対象になると判断して、決定した次第です。

さて、特別賞の1番目は、大泉啓一郎氏の『新貿易立国論』です。過去20年間、日本の国際的プレゼンスの低下が言われてきました。しかし、そのことを新興国・途上国の台頭と合わせて、実証的に明らかにした本は意外と少ないと言えます。本書は、『老いてゆくアジア』や『消費するアジア』で、アジア地域の実態を鋭く分析してきた著者が、膨大な貿易データや生産データを駆使して、国際経済に占める日本の立ち位置の変化を、丹念に解明していきます。その上で、日本はアジアの中の経済大国としてではなく、アジア、とりわけASEAN諸国と連携しつつ、新たな成長の道を見出すべきだ、またそこにこそ日本企業にも商機がある、というのが大泉氏の主張です。アジアに進出することで「貿易立国」を実現した過去の日本に戻るのではなく、ASEAN諸国と連携することで「新

しい貿易立国」を目指せというのが、本書の力強いメッセージです。

2番目は、小島道一氏の『リサイクルと世界経済—貿易と環境保護は両立できるか』です。

リサイクル＝再生利用とリユース＝再利用。両者を合わせた商品のリサイクルは、決して日本国内で完結しているわけではありません。日本からの主要な輸出商品の中に中古の自動車があり、日本で販売される中古のコミック本はカンボジアで研磨されています。いまや、日本のリサイクルの世界はアジアを中心とする国際ネットワークの中で動いています。その実態を、製品別に丹念に調べレポートする。製品ごとに安全性や環境汚染の問題を検討し、現在の規制やルールの問題点を検証していく。

毎年50日から90日も海外調査に従事する著者ならではの、豊富な情報に支えられたルポルタージュが、この本の特徴です。小島氏にはもちろん学術論文もありますが、多数の写真や現場でのエピソードを紹介する本書は、リサイクルの国際ネットワークの現状を分かりやすく伝える格好の本といえます。大泉氏の本と共に、大平首相が掲げた「環太平洋連帯構想」の今後のありようを示す良書であると考えます。

以上、6名の方の今回の授賞を心からお喜びすると同時に、今後ますますのご活躍を期待いたします。



川渕三郎様の挨拶と乾杯

皆様こんにちは、只今ご紹介いただきました川渕でございます。本日は大平正芳記念賞受賞者の皆様誠におめでとうございます。こういった著作の選考をするにあたって、選考委員の方のご苦労は大変だと思います。選考委員の皆様もご苦労様でした。

僕は、1991年10月30日に古河電工を辞めました。11月1日にJリーグのチェアマンになるためなのですが、その時の壮行会で大平裕さんが挨拶してくれたのを鮮明に覚えています。中身全部というわけではないのですが、「川渕さん、いまサッカー界の置かれている状況は明治維新の前の慶応2年位に当たりますよ。これからどう明治維新のような成功に導いて行けるか、大変なことです、しっかり頑張ってください」といったことでした。僕は鮮明に覚えています。普通挨拶なんて覚えているものではありませんよね。大平さんが、覚えているかどうか知りませんが、慶応2年と言った、印象深い言葉で激励して貰ってそういったものが僕の双肩にかかっているのだな、ということ深く意識したのは、大平

さんの挨拶でした。

それに遡ること3年前、1988年というのは、僕の運命を変えた年なのです。当時僕は古河電工の名古屋の営業部長。トヨタの車がどんどん売れている時代ですから、営業している生産材がどんどん売れて、僕が相当努力して営業成績をあげてたかのように錯覚していたから、いずれ本社に戻って、営業部長、そして取締役になるだろうと思っていました。その矢先、5月2日、休暇を取って家に居たのですが、支店長から電話があつて、「川渕君、ちょっと悪いけれど話があるから来てくれないか」と。「僕は休暇を取っているのですが、何なんですか？」と言ったら、「直接話をしないと、これは大きな問題だからどうしても会って話したい」と、「どうしても話したい」といったって、電話で話してくれていいじゃあないですか」と言いましたら、「電話で話すようなものではないんだ、とにかく来てくれ」と、押問答をした。支店長は僕の気質を知っているから、困り果てて、「そうだな、それなら言うけど、関連会社への出向が決まったよ」と言われたのですよ。「そんな大事な話電話でするのですか」とは言わなかったのですが、頭が真っ白になりました。その時女房は横に居たのですが、顔が真っ青になった僕をその時始めて見たと言っていましたから、それ位ショックだったのでしょう。

その時一番初めに思ったのは、「古河電工なんて辞めてやろう、こんな会社、俺の値打ちを何も分らないのだから」大体自分の評価は普通、人事が評価するより2割、3割高く本人を評価するのですよね。だから人事への不平・不満が絶えずあるわけですから。でもその時本気で辞めてやろうと思いました。

関連会社に行ってもサラリーマンとしての先が見えている、何かないだろうかという時、たまたま当時の日本サッカーリーグというJリーグの前身なのですが、そこの全部を取り仕切るトップとして総務主事になってくれないかとい

う話があったのです。その時初めて、そうだ今までサッカー界にお世話になったのだから、恩返しをしようと。当時の日本はサッカーは人気がなかった。熱狂的なファンは、当時読売クラブ、日産、ヤマハ、三菱ぐらいでしたかね、あとの試合は観客席はガラガラで数百人、古河電工が西が丘でやった試合で3千人入ればいい状況でした。世界で一番盛んなスポーツはサッカーということは、同じ人間である日本人もそうなるに違いない、日本人のサッカーを好きにさせる方法が絶対にある筈だということで、Jリーグをつくる時の僕のスタートになったわけです。

当時日本のサッカーというのは皆様殆んど想像がつかないと思いますが、お客さんが入らない、テレビの放送はない、新聞にもほとんど載らない、スポンサーもつかない、良いスタジアムもない、ナイナイ尽くしなんです。そういった中でプロ化を考えるというのは、およそ馬鹿ですよ、だって、スタジアムさえないので。そういう意味で企業から脱皮して、新しいサッカーのクラブをつくって、多くのファンの支持を得てそのクラブが自立してやっていかなくては成功しないわけですから。その中で一番大事なものは、ホームスタジアムをどうするか、それが一番の大問題だったのです。

日本にサッカー専用の競技場というのは、西ヶ丘、三ツ沢、大宮、神戸中央の4つしかなくて、せいぜい5千人しか入らなかったのですから、プロとして成功するわけはありませんよね。1万5千人以上収容できるサッカー専用とはいわない、陸上競技のトラックがあるその中を芝生のグラウンドにする、カクテル光線をつけてそこでサッカーをすれば、カクテル光線が緑の芝生に映えて、サッカーは面白いなと思わすことが出来る、サッカー上手く見える、スピード感も上がる、カクテル光線でナイターでやると観客席のガラガラなのが見えない、そういった意味でカクテル光線のある、1万5千人収容のサッ

カーをホームグラウンドとするようにと。ちゃんとできたところをJリーグのクラブに入れるということを言ったんですよ。

僕自身も直接市長の所をお願いに行きました。建設省の事務次官をしていた方だったと思うのですが、その市長の所へ行きました。その時一番に言われたのは、「一企業のサッカークラブに行政サイドがいろいろバックアップするのはおかしいのではないか」ということでした。

ここで一番大切なのは理念なのです。Jリーグには3つの理念があって、その一つはサッカーの技術向上・普及・促進というのは当然の事。二つ目がJリーグの命なのですが、豊かなスポーツ文化の振興と国民の心身の健全な発達への寄与、三つめは、国際文化交流・親善ということです。一つ目と三つ目はサッカーをやっていればおのずと事の大小は別として自然とできますよね。

二つ目の、豊かなスポーツ文化の振興と国民の心身の健全な発達への寄与というのは、どういうことかということ、地域社会の人たち、老若男女だれでもJリーグのクラブに行けば自分の好きなスポーツをそれなりの指導者がいて教えてもらい、楽しませてくれる、そういう場所を日本全国につくりましょうというのが、この一番大事な理念なんですよ。

皆さん、ご年配の方はよく覚えておられると思いますが、当時の読売新聞の渡辺社長と、このことについて侃々諤々相当やりあったわけです。当時地域社会に根ざしたスポーツクラブってなんのこっちゃって、渡辺社長のみならず、日本全国の方には分からなかった。ところが今はプロ野球は地域に根ざしていますよね。当時はそういう空疎な理念を掲げる川渕が居る限りJリーグは成功しないといわれてましたね。

何かある度に渡辺さんとやりあったので、それが新聞の一

面に載ったのですよ。渡辺さんがある表彰式の席で、僕のことを「川淵は独裁者だ」といわれて、新聞記者がバァーと僕の所に来て、「川淵さん、渡辺社長から独裁者と言われてどうですか？」と。この時僕の答えが、いろいろなことを経験してきたから、「独裁者から、独裁者といわれて光栄です」といったら、それが新聞の一面に載った。そういうことがあって、渡辺さんとのやり取りが、その頃のＪリーグのニュースだったのですよね。

競技場をつくるというのが、一番の大問題で、その中でいろいろ選考しているときに、実はプロに参加したいと行ってきたのが20社あったのですよ。20社あるとは夢にも思わなかった。当時はバブルの頂点だったのです。行政サイドも地方も財政豊かで、それをどう使ったらいいのか分からなかった。サッカーのフィランソロフィー、地域社会の貢献、社会還元といったことが多く語られていた。地方としてどうしたらいいのか、地域社会の活性化に当たって行政サイドもスポーツクラブをＪリーグがつくって、これに乗っかるのも面白いかなというので、取敢えず手を挙げたのが20社きたのですよ。

世界のサッカークラブは、ホームスタジアムがある、法人化している、ユースの組織がある、スポンサーがついているなどなど。

そういう条件からすると日本の実態は「ステップバイステップ」、そこにたどり着こうとするにはあまりにも差がありすぎて、ちょっと努力すれば近づけるというものは何一つなかったのですね。プロとして成功する術というのは、何かというと、バスケットボールの時もそうですけれども、観客動員数をいかに大きくするか、それが全てなのです。その当時、日本のサッカーは年間を通じて30万人ぐらいいしか観客動員が出来なかった。

参加希望を絞っていた中で、鹿島（住金）が残ったのですよ。皆さまご存知のように鹿島というのは、茨城県の端の方で、当時農業と漁業の人たちが町民として1万8千人～2万人いて、そこに鹿島臨海工業都市が出来て、住友金属、三菱油化のエリート社員が移り住んで2万5千人、この2万5千人をどう活性化するかということで、プロ化を通じて若手に人気のあるサッカーを通じて何とか活性化したいという思いが行政、企業にはあった。選考委員会でいつも落とそうと思いながら、余りにも熱心なので最後の最後まで選考に残ったのですよ、6つの中の一つで。

6つから2つをどう選ぶか、その時引導を渡そうと思って、鹿島の人に東京に来てもらったのです。そこに来たのが中村さんといって、鹿島製鉄所の所長で、次の住友金属の社長になった人。町長と北畑さんという通産省から出向していて、後に事務次官なった人もいた。「川渕が駄目だと言われるだろうな」と、一縷の望みを抱いて来ているのがよく分かるわけです。中村所長が、「川渕さん参加できる可能性がありますかね？」と聞かれたので、「申し訳ありません。可能性は100パーセントありません」とは言えないですよ、さすがに僕も。「そうですね、申し訳ないです、99.99パーセント可能性はありませんよ」といったのです。そうしたら中村さんの顔がパット明るくなって、「川渕さん、100パーセントではないのですね」と。「あ！　しまった、100パーセント」と言えばよかった。「99.99パーセントといたら100パーセントと同じではありませんか」と言ったら、「そうじゃありません、99.99パーセントといたら、コンマ0.01パーセントあります。それはいったい何ですか？」と聞かれたのですよ。とにかく諦めさせればいけないんだと、そこで一生懸命考えて、ハタと思いついて、「そうですね、いま日本にない観客席に屋根のついた1万5千人収容のサッカー専用の競技場つくるっていうなら別ですけどね」と言ったのですよ。他のクラブにはそんなこと一切言ってないのに。観客席に屋根がついたなんて言っ

てないし、サッカー専用の競技場というのも言ってない。陸上競技場の中のグラウンドを芝生にして1500ルクスのカクテル光線をつけてくれれば充分ですよと言ってたのにです。

なんで我々だけそういうことを要求するのかといってもおかしくないのに、すごすごと帰って行ったのですよ。それから1週間後、電話で川渕さんにお会いしたいということで、「長らくお世話になりました、Jリーグに入ろうと思っている努力したけれども、努力の甲斐がなく断念せざるを得ません、Jリーグの成功を心から願っています」と言いに来るんだろーと思いますよね、「で、どうぞ」と言ったら、ゾロゾロと12名ほど入ってきたのですよ。あれ、やめる割には随分人数多いなと。「川渕さん、竹内知事が観客席に屋根がついた1万5千人収容のサッカー専用競技場つくる」と聞いた時は驚きましたよ。そんなものつくってくれちゃ困ると思って。「中村さん観客動員どうするの？ ボランティア活動どうするの？ 思いつくまま無理難題を言ったら、それは全部町ぐるみ、企業ぐるみ解決すると言ってきたのですよ。最後の最後でJリーグの委員会に出した時、新しいイベントをするとき一番大事なのはハードだと。屋根のついたスタジアムをつくるためには時間もお金もかかる、そういうものをつくれれば、すべてスタジアムのサンプルになるのだから、Jリーグ加入を決めましょうと、最後の最後で決まったのですね。その鹿島がいまJリーグ一番のクラブとなった。20もタイトルを取って、この間もACLのチャンピオンになりましたけれども、あの時100億円の競技場をつくることに出資してくれなかったらいまの鹿島は存在しなかった。

Bリーグというのが、プロバスケットボールのことです。2014年の4月に、当時82歳の小浜さんが僕を訪ねて来たのです。その人は、元バスケットボールの日本代表の監督で、バスケットボール協会とは何も関係はないのですけれども、「川渕さん、何とか2つに分裂している日本のトップリーグを1つ

に合併させてほしい、合併しない限り2014年10月以降の国際試合に出場停止になります。リオデジャネイロオリンピックの予選すら、参加できません、何とかしてください」と言ってきたのです。その時はそこまで頼まれたのならと、いろいろ調べました。協会と分離して10年前にプロをつくって除名された bj リーグ。一方は企業の、三菱、日立、トヨタ、アイシン精機など8企業が中心の NBL リーグ。一方にはお金がある、片方はお金がない、片方はエンターテインメントとして一生懸命地域に根ざして活性化をしている、一方は一切していない、根本的に成り立ちも全然、イベントにおいてもまるで違う、2つを一緒にするというのは無理だろうといわれていたのです。

いろいろやったけれども結果は上手く行かなくて、2014年12月に FIBA 国際バスケット連盟から国際資格停止された。その時 FIBA の事務総長だったバウマンさんが、たまたま僕のことを知っていて、何とかチェアマンになって2つのリーグを1つにしてくれと頼まれたのです。その前段階で僕は統合に向けて努力したのですが、途中で会長もみな逃げちゃって、統合出来なかった。何たることだと、今までこれだけ一生懸命努力したのは何だったのか、まったく無に帰してしまうのだから、頭にきました。だからバウマン会長が、「川渕さん、統一に力を貸してくれ」といわれた時、「僕しかいません、統一は僕しか出来ません」と言って引き受けたのです。

それが、2015年1月です。2月に全部の理事、評議員、各クラブの代表を呼んで会議を開いた。その時新聞記者やテレビカメラがいっぱいいた。にもかかわらず翌日の新聞を見たら、F C 東京の武藤がまだ日本に居たのですけれども、彼の身長登録の178センチが今年は179センチになるという記事が大きな写真で出ていて、その下にバスケットボールの会議の記事が小さく出ていた。バスケットボール協会にしてみれば本当に大きな会議なので、大きく取り扱ってくれると思っていた。それほど当時のバスケットボールの人気はな

かったのですよ。その当時の日本バスケットは将来に向けての vision がなかったのですよ。バスケットボール界には何のためにプロをやっているのか、何のために外人を3人も4人も雇って赤字をたれ流しているのか。何のためにというものが無い、何のためにという vision がなければ話にならないということですよね。

月刊 [WILL] という雑誌に3年前、山中伸弥さんと櫻井よしこさんの対談が載っていたのを読んで、僕は本当に感銘を受けました。山中伸弥博士は、外科医になろうと一生懸命だったのですが、動物実験では上手く行くのに人間となると上手く行かない。人が20分で済むものを山中さんだと2時間も3時間もかかる。そこで担当の博士から「ジャマナカ、ジャマナカ」といわれて、本当に駄目な先生だったらしい。自分は外科医としては成功しないと思って、もう一度大学に行って基礎研究、脊椎損傷など今の外科医の手術で治せないような難病を治すために研究者になってアメリカへ行くのですよね。アメリカへ行って3年経って、そこでアメリカの部長がポスドクを20人集めて、研究者として成功する秘訣を教えるといったのです。それは、「VW」だと、「vision」と「work hard」だと、そこで、「シンヤ、君は日夜働いているのはよく知っている、君の vision はいったい何なのか」と聞かれて、答えに窮して、「良い論文を書きたい、良い地位に就きたい、研究資金が欲しい」と言ったら、「それは vision を達成するための手段に過ぎない、君は何をもって家族を引き連れてアメリカまで来たのだ、いったい何をしにアメリカまで来たのだ」と言われて、山中博士はショックをうけた。そこで初心に返って、よくよく考えてみたら、自分は外科医が直せないような難病の患者を救いたいのだと、初心に戻ってやった結果、紆余曲折があったけれどもノーベル賞をもらえるまでになった。

その話を聞いて、僕はいつから「vision」を持ったのかなと

考えたら、1988年5月2日ですよ。それまでは会社の重役になりたい、大きな家に住みたい、良い車に乗りたい給料が沢山欲しいとしか思わなかった、しかし、1988年の5月に「お前は出向だ」と言われた時に、よし、これからの僕の人生はサッカーのために生きてやろうと、サッカーを日本で本当に人気のあるスポーツにしてやるという強い気持ちが生まれた。その時ですよ。vision を持ったのは。

「Vision」というのは自分は何のために生きているかを考える事だと思う。

乾杯の前にもう一つだけ、渡辺恒雄さんとはその後仲直りをして対談までさせていただきました。あの人はほんとうに哲学者なんですよ。話の中でカントの「純粹理性批判」のコペルニクスの転回というのが出てきまして、コペルニクスの転回というのは、どんなに考えても解決できない時は、たとえ常識に反するとも180度考え方を変えてみるということです。それを知って、Bリーグの改革の時にどこで発想の転換をすべきかを考えた事が成功に繋がったのだと思います。Jリーグは結果からみてコペルニクスの転回をいっぱいやったのですけれども、それが前提にあったわけではなかった。今回のBリーグのコペルニクスの転回というのは、10億円の資本金で、債務超過寸前になって、それをどうするかという問題ばかり矮小化されていて、解決策を見出だせなかった。そこを発想を転回することで、200億、300億になるような大きなバスケットボール界のあり方を求めたことで今のBリーグに出来上がったのです。そのようなことで、発想の転換というのは大事だなということが分かったというのを、乾杯の挨拶とさせていただきます。

大平正芳記念財団 ― 合同役員会

(ホテル・グランドヒル市ヶ谷)



大平知範理事長の報告



合同役員会で「第 35 回大平正芳記念賞」の授賞者の皆さんが紹介されました

● 運営・選定委員

委員長・末廣昭

委員・青山和佳／金子芳樹／川島真／

木村福成／久保文明／黒崎卓

受賞の言葉

〔大平正芳記念賞〕



受賞作

『Diplomacy Meets Migration : US Relations with Cuba during the Cold War』

かみ ひであき
上 英明

(神奈川大学外国語学部准教授)

このたびは、名誉ある大平正芳記念賞を賜り、誠に光栄に存じます。財団関係者の皆様、運営・選定委員の諸先生、本書執筆にあたりご指導を下さった方々、本書の出版をご支援くださった方々に、心より御礼を申し上げます。

本書は、半世紀にわたる米・キューバ関係の歴史を描き直すことを目的としております。なぜ両国の外交関係は近年にいたるまで途絶えていたのか。なぜ中国やヴェトナムと国交正常化を実現し、経済関係を深めてきた米国が、国交回復の条件として、このキューバにだけは体制転換を要求してきたのか。どうして冷戦期、そして冷戦後においても、キューバだけがこのような特別扱いを受けてきたのか。

このような問いについて、従来においては「移民」の力を指

摘することが常でありました。すなわち、キューバ革命に反対する人々が合衆国に渡り、フロリダ州マイアミで一定の経済的、政治的、文化的地位を築いたことが注目を集めたわけです。そこで本書では通常の外交史とは異なるアプローチをとりました。すなわち、二つの国家中枢にあたるワシントンとハバナに加え、このマイアミを物語の中心に据えております。通常であれば二つの政府のやりとりで済む外交の話をわざわざ移民社会をまじえた三角関係として捉え直すことには大変な労力を要します。しかし本書においては、こうでもしなければ米・キューバ関係の歩みを理解することは到底できない、と主張しております。

本書では、このように「外交」と「移民」という二つのキーワードを中心に、米・キューバ関係の歩みを米国史、中南米史、そして国際関係史が重合する地点において描きました。現在、中南米から合衆国へと押し寄せる圧倒的な人の移動に伴い、移民を受け入れる合衆国、そして移民を送り出す中南米諸国は大きな変貌を遂げつつあります。このたびの受賞を励みに、そしてこれまで私を支えてくれた家族への感謝を胸に、今後も南北アメリカを取り巻く多次元的な人間関係の動態とそれに伴う社会の長期的変容を追い、積極的に研究を進めて参りたいと存じます。

受賞作

『アメリカ大統領と政策革新—
連邦制と三権分立制の間で』

うめかわ はな
梅川 葉菜

(駒澤大学法学部政治学科専任講師)

この度は、名誉ある大平正芳記念賞を賜り、大変光栄に存じます。大平正芳記念賞の運営委員、選定委員の先生方、財団関係者の皆様に心より御礼申し上げます。また、長きに

渡って多大なご支援を賜った指導教官の先生、ご指導いただいた先生方、本書を完成まで導いてくださった東京大学出版会の皆様、そして本書の刊行を可能にくださった全ての皆様にも、心より感謝申し上げます。

本書を執筆する手がかりは、アメリカ政治の根幹をなす連邦制と三権分立制の双方の繋がりでした。長らくアメリカ政治研究は、これらの制度を、互いに独立したものと捉えてきました。ところが、近年のアメリカ政治を見ていると、大統領と議会の間の争いに州政府が割って入る、ということがしばしば生じております。本書では、大統領が州政府を味方につけることで、議会の新立法によらずに政策を変更するという、アメリカの三権分立制の一般的な理解から乖離した手法を獲得し発展させていった経緯を歴史的に明らかにしました。それにより、三権分立制と連邦制の間に、実は密接な結びつきがあることを示すことができました。

本書が着目した大統領の新手法とは、アメリカ政治学においてもあまり知られていない特区認可権 (waiver authority) です。特区認可権とは、連邦法に従って州政府が実施する政策に関して、従来の連邦法の下では実施できないものの、その法律の目的を実現するためのより良い方法だと見込まれる「特区事業」を特定の地域、期間内で執行できるよう州政府に認める、執政府に与えられた権限です。本書は、レーガン政権からオバマ政権までの歴代政権が、特区認可権を、議会を迂回する政策変更手段として利用し、福祉、医療保険、教育の分野で政策革新に成功したことを示しました。

このように本書は、現代アメリカ政治についての理解を深めることに一定程度の貢献を果たしたものと考えております。このたびの受賞を励みとし、より一層、研究に精進してまいります。

受賞作

『Authoritarian Capitalism Sovereign
Wealth Funds and State—Owned
Enterprises in East Asia and Beyond』

リチャード カーネイ
Richard W. Carney

(Assistant Professor of Strategy, China Europe International Business School)

大平正芳記念賞を受賞し大変光栄に存じます。財団の理事の方々、選定委員会の先生方に厚く御礼申し上げます。

経済自由化改革のグローバルな波及に関する優れた論文はたくさんありますが、それらとは異なり、本書『権威主義的資本主義』では、政府系投資ファンドとか国営企業のような国家がコントロールする経済主体が、世界経済の中で過去20年間にわたり、その役割を増してきたことを論じています。本書では、最初に国営事業体の発展とその規模について紹介し、次に、何故彼らが時として外国企業に積極的な投資を行うのか、それについて問うています。

これまでの研究は重要な政治的現象を見逃してきました。具体的には、「支配政党型権威主義体制 DPAR」の台頭がそれです。DPAR は民主主義と権威主義の複合体制です。民主主義と同じく、複数政党が競い合う選挙があるものの、政権交代に発展することは滅多にありません。権威主義体制だからです。DPAR の顕著な例としてはマレーシアとシンガポールの2国が挙げられます。DPAR は冷戦が終結してから華々しく発展を遂げ、いまや全世界の体制の三分の一を占めるまでになっています。にもかかわらず、これまでの研究は、国家による企業部門への干渉という重要な事実を見落としてきました。

DPAR の指導者たちは、経済成長と同時に体制安定を維持することを望んでいる、というのが私の主張です。じつは国営企業 SOE を上場することにより、経済成長と体制安定のバランスを上手く取ることが可能になります。SOE の上場は否応なく彼らを市場競争に向き合わせ、それによって収益性を高めると同時に、政府の無駄な財政支出を減らすことに

なります。それと同時に、国家が上場企業の株式を保有することで、現体制の権力と安定を保持するという政治目的を達成します。というのも、DPARの体制は野党が選挙で戦うことは認めるものの、野党に権力を移譲する意思はないので、いったん体制を脅かすような政治的な脅威が増してくると、DPARの指導者たちは企業への干渉を強めるからです。

先に述べたように、DPARは全世界の体制の三分の一を占めており、その意味するところは重要です。「単一政党型権威主義体制 SPAR」は中国などですが、全体制の約5%です。ブルネイなどの「狭義の権威主義体制 NAR」は全体制の約10%です。

本書の議論は沢山の事例研究に基づいています。ある章では全世界でのパターンを紹介し、別の章では、3000社以上の企業の「究極の所有者」に関するデータに基づきながら、アジアに焦点をあてて分析を行っています。

大平正芳記念賞受賞は私にとって、変化を遂げるアジアの権威主義体制とアジア域内諸国の相互作用について、今後の研究を進めるうえで大変な励みになります。この研究を通じて、権威主義体制についての理解が深まることにより、相互の誤解が減り、協調が進み、さらには環太平洋連帯意識が強化されることを望んでいます。

受賞作

『朝鮮外交の近代— 宗属関係から大韓帝国へ』

もり ま ゆ こ
森 万佑子

(東京女子大学現代教養学部国際社会学科国際関係専攻専任講師)

この度は、大変名誉な大平正芳記念賞を賜り、誠に光栄に存じます。

受賞作『朝鮮外交の近代—宗属関係から大韓帝国へ』は、朝

鮮史研究のこれまでの成果に学びながら執筆しました。日本の朝鮮史研究には長い伝統があり、精確で緻密な史料解釈による世界レベルのすばらしい研究成果が多く蓄積されています。しかしながら、朝鮮史研究の作品がこのような大きな賞をいただくことはあまりありません。そのため、この度、朝鮮史研究の成果にスポットライトを当ててくださった選定委員の先生方および財団の皆様には深く感謝しております。朝鮮史研究は、単なる隣国の歴史研究という意味にとどまらず、今日の日韓・日朝関係を理解し、環太平洋の国際関係を考える上でも必須の研究分野です。今回の受賞により、少しでも多くの方が朝鮮史研究について興味を持ってくだされば、これ以上の喜びはありません。

拙著が扱った19世紀末の朝鮮は、中国(清朝)との間で宗属関係などと呼ばれる関係を有していました。拙著は、そうした中国と朝鮮の関係やその前提としての中華を、朝鮮の立場から見るとどのように見えるのか、当時の文脈に即して検討したものです。19世紀末は、日本・欧米諸国から条約がもたらされ、その秩序が現代まで続いているため、どうしても朝鮮が条約関係をいかに理解したかに関心が向きますが、拙著は、朝鮮が条約以上に中華と真摯に向き合っていたことを指摘しました。朝鮮は、明朝ではなく清朝が中華の後継者となり、さらに清朝が条約関係を参考にしながら宗属関係を変化させてくることに反感を抱きつつも宗属関係を維持し、他方で、朝鮮こそが中華の正統な継承者であるという自負を持ちました。いわば、こうした二元的中華のもとで、朝鮮は対外政策を行ったのです。その後、下関条約によって清朝との関係が消滅し、中華が一元化したとき、朝鮮は1897年に大韓帝国を成立させます。このように中華の存在形態の変化に着目し、大韓帝国成立までを見通した朝鮮外交の展開を論じたところに拙著の独創性があります。

最後に、拙著の出版を導いてくださった松下幸之助記念志財団の皆様および名古屋大学出版会の皆様にお礼を申し上げます。そして、わたくしをここまでご指導くださった月脚

達彦先生と岡本隆司先生に、この場を借りて、改めて衷心より感謝申し上げます。

受賞作

『新貿易立国論』

おおいずみ けいいちろう
大泉 啓一郎

(亜細亜大学アジア研究所教授)

このたびは名誉ある大平正芳記念賞特別賞を賜り、大変光栄に存じます。

本書が目指したのは、日本企業を主語にしたアジア経済論でした。というのも、これまでのアジア経済論は、対象として日本自身を含めないことが多く、そこでの日本の扱いは、企業活動や支援・協力を通じたアジア経済への影響という、一方通行の議論が主となっていたからです。しかし、現実には、日本がアジアのなかで唯一のリーダーという昭和時代は遠い昔のことで、アジア新興国が台頭するなかで、新しい日本の立ち位置が明確になるようなアジア経済論が求められると考えたからです。

そこで、「アジアと日本」ではなく、「アジアのなかの日本」をキーワードに、世界に広がるサプライチェーンが日本とアジアをどう変えたか、そのなかで日本企業はいかに立ち振る舞うべきかに焦点を当ててみようと思いました。また、10年後に読み返して、日本は、何を乗り越え、乗り越えられなかったのかを評価できるように、現状分析だけでなく、苦言・提言も数多くちりばめておきました。そうした野心もあって、小さな本ですが、企画から完成まで5年の月日がかかってしまいました。しかし、その分、個人的には約30年間勤めた日本総研という民間調査部で得た経験と知識の集大成となり、ある種の「平成時代のアジア経済論」になったのでは、という思いはあります。それが環太平洋連帯構想の発展に貢献す

る著作を表彰する大平正芳記念賞特別賞のひとつに選ばれたことは、まさに感無量です。ありがとうございます。

今年の4月からは亜細亜大学アジア研究所に籍を移し、研究を続けることになりました。気持ちはすでに「令和時代のアジア経済論」に向かっています。おそらく、アジア全体では「デジタル化」が、日本では「日本のなかのアジア」がキーワードになるだろうと感じております。引き続き、皆さまからのご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

受賞作

『リサイクルと世界経済—

貿易と環境保護は両立できるか』

こじま みちかず

小島 道一

(東アジア・アセアン経済研究センター シニア・エコノミスト)

大平正芳記念賞特別賞を頂き、大変光栄です。賞をいただいた『リサイクルと世界経済』は、国際的に取り引きされている再生資源や中古品、輸入した国でのリサイクルやリユースについて、1998年以降に進めてきた研究をコンパクトに紹介したものです。本書の企画を立てた当初は、全く想定していませんでしたが、2017年末から、廃プラスチックや古紙を大量に輸入していた中国が輸入規制を強化し、再生資源の貿易について注目が集まる中で、出版することができました。経済活動がグローバル化する中、環境汚染につながらないようにしながら国際的に資源循環を進めることの重要性を広く理解いただければと考えております。

この本は、アジア経済研究所に所属しさまざまな経験を積ませていただいたからこそまとめることができたと考えております。最初に配属されたアジア地域の経済予測を行う部署では、アジア地域を俯瞰するような研究の重要性を感じる機会となりました。研究所に入る前から考えていたアジア地域

の環境問題に取り組む機会もいただき、多くの諸先輩や同僚に助けていただきながら研究を進めることができました。国内外の研究者との共同研究の中で学んだことも少なくありません。また、航空運賃の低下、インターネットの普及によるコミュニケーション技術の発展がなければ、複数の国を対象に現場を訪問し、実態を理解し、国境を越えた構造を考える研究はできなかったと感じております。

国際的な資源循環というテーマについては、海外でも高まっております。すでに、本書の韓国語訳も出版されました。本書の出版後も、廃プラスチックの貿易に関して、バーゼル条約の附属書が改定されるなど、さまざまな動きがあります。この分野の研究を引き続き進め、日本だけでなく、海外でも国際的な資源循環を考える参考資料となるような研究成果を発表していきたいと考えております。

●贈呈式及び記念パーティーより（ホテル・グランドヒル市ヶ谷）



大平知範理事長の挨拶と会場風景



梅川葉菜様、上英明様、リチャード・カーネイ様、森万佑子様、大泉啓一郎様、小島道一様—左より



上野聡様、大鶴義丹様、大平知範理事長、杉本卓弥氏、赤池正臣様、後藤直明様—左より



田熊典敬様、川渕三郎様、大平裕様、中野幸生様、山岸建彦様—左より



川島真様、森万佑子様、橘宗吾様—左より



前田健太郎様、久保文明様、上英明様、梅川葉菜様、梅川健様、奥田修一様—左より



小野一雄様、小島道一様とお嬢様、橘宗吾様、勝康裕様—左より



岩成真一様、伊藤亜聖様、大泉啓一郎様ご夫妻、末廣昭様—左より



リチャード・カーネイ様ご夫妻、上英明様ご夫妻とお子様、上けい子様—左より



大平吉子様、矢野仁志様、渡辺満子様—左より



齊田晴一様、川渕三郎様、植村頼音様、大平裕様—左より



鈴木崇様、海野家の方々—左より

風信・来信

●日本人のイスラーム美術研究者として

大平正芳記念賞をいただきました『絨毯が結ぶ世界—京都祇園祭インド絨毯への道』(名古屋大学出版会、2016年)の内容について、先日(2019年7月19日)、京都新聞に掲載されました。最近は、イスラーム装飾が東アジアに及ぼした影響についての論文(『美術フォーラム21』40号に掲載予定)と、オリエント絨毯と柳宗悦ら民藝運動のひとびと、ならびにウィリアム・モリスとの関係についての論文を執筆しています。海外調査を頻繁に行うのが難しい現状ですが、日本人のイスラーム美術研究者であることを生かして、国内で調査・研究できることに焦点をあて、教育と学務の合間に、少しずつ研究を進めております。(鎌田由美子・慶應義塾大学経済学部准教授、第34回大平正芳記念賞受賞者)

●毛里和子著『現代中国外交』岩波書店、2018年



21世紀に入って中国はグローバルに動く、全世界に外交課題をもつ大国になった。海洋進出、力の外交も顕著である。ライバルの米国ではトランプ政権という巨大な不確定要素が出てきた。米中の「新冷戦」も予測され、中国外交の冷静な分析が今日ほど必要な時はない。本書は前半で政策決定など中国外交の機能的分析を行い、後半で

日中・米中・中ロの二国関係を論述、中国外交のトータルな分析を狙ったコンパクトな文献である。(毛利和子・早稲田大学名誉教授、第15回大平正芳記念賞受賞者、前運営・選定委員)

●鈴木与平編著『地方創生とフジドリームエアラインズの挑戦』イカロス出版、2019年



2009年7月23日にスタートした新しい定期航空会社、フジドリームエアラインズ(FDA)。地方と地方を結ぶ翼FDAが就航10年目を迎えた。

富士山静岡空港、県営名古屋空港(小牧空港)を拠点に、14機のフリート体制で、全国19路線、毎日80便に定期就航。北海道・稚内から沖縄・与那国島まで年間1400便の運航実績がある。

本書はFDAの代表取締役会長・鈴木与平氏(当財団理事)をはじめ、取締役、各部門長ら第一線の社員が執筆。就航

地ごとのさまざまな取り組みの実例を紹介、地方活性化に資するリージョナル航空の展望を示す。

●高松高商卒業アルバムの寄贈を受け記念館に展示

高松高商の同級生である故高岡實さんのご遺族より卒業アルバムをご寄贈いただき、記念館に展示いたしました。アルバムには大平総理の写真と橋本清さんによる人物評が記載されています。(下記参照)

橋本清さんは高松高商から神戸商大(現神戸大学経済学部)を経て、横浜正金銀行(東京銀行の前身)・東京銀行の常務へと歩まれ、その生涯を通じて無二の親友でした。



＜橋本清評＞

噫！我遂に漂渺たる主観の融合に、浩蕩至上の光樂を讀し、無象の大氣に嚴然たる明哲の「我」を見出し得ぬ不幸に泣くのみなりしか。

…否…笈を讀土に負ふて茲に十有四年快心の友は遂に來れり。一念三千を攝するの徹底を求めて飽く無き彼にこそ、我は意志一元の終焉に喘ぐショペンハフエルの冷膽よりも、悲痛の根底に福音を採めしニイチエの情熱を認めるものである。噫好漢！花を荒蕪の冬に知り、光を闇に認めて、眞善美の曉鐘を撞かんとする彼よ！

蒼茫と暮る、落莫の秋に我頬を傳ふ一滴滴を君知るや否や？

●財団役員の就任

2019年6月12日 佐藤東洋士氏が新理事に新任されました。

2019年6月12日 岩成真一氏が新評議員に新任されました。

2019年8月19日 元理事・和田一夫氏が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

●大平正芳記念財団へのご寄付者名

【300万円】かんべ土地建物(株)(神戸雄一郎様)、【150万円】三木証券(株)(鈴木崇様)、【100万円】(株)桃李(齊田晴一様)、大平裕様、【50万円】鈴木岩男様、【30万円】吉村元久様、小泉達也様、【23万円】早川運輸(株)(早川正雄様)、【20万円】丸善工業(株)(三谷朋幹様)、【15万円】小川武一郎様、【10万円】福川伸次様、鈴木与(株)(鈴木与平様)、(株)世紀(木内俊二様)、(株)パリス(齊田博一様)、(株)ジンコミュニケーションズ(雨宮愼一様)、明石被服興業(株)(河合秀文様)、この他234名の個人・団体の方々より御芳志をいただきました。(順不同、2018年9月～2019年8月)



「大平正芳記念財団レポート」第37号
発行・公益財団法人大平正芳記念財団
発行人・大平 知範

2019（令和元）年9月発行

〒102-0082 東京都千代田区一番町10番地 相模屋第二ビル5階
電話 (03) 3230 - 2213 FAX. (03) 3230 - 2214
URL : <http://www.ohira.org/>

THE MASAYOSHI OHIRA MEMORIAL FOUNDATION

Sagamiya_Dai 2 Bldg. 5F
10, Ichibancho, Chiyoda-Ku, Tokyo,
102-0082 JAPAN
Tel. +81(Japan)3-3230-2213
Fax. +81(Japan)3-3230-2214
URL:<http://www.ohira.org/>